

研究主題 「学びを結びつける力の育成」

1 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

近年、情報技術の飛躍的な進化などを背景にして、知識・情報・技術をめぐる変化が加速している。それに伴い、社会的変化が予測を超えて進展していくことで様々な分野において解決が困難な課題が生じてくる。また、グローバル化が一層進み、多種多様な人との共存が必要な社会になっていくことが予想される。

これからの時代を子供が生きぬくためには、社会の様々な変化に受け身で対処してはいけけない。それらと主体的に向き合って、多面的な視点を持って柔軟に受け止め、様々な他者とかかわりながら、解決の見通しを持って対応し、よりよい未来を創造していくことが求められる。

(2) 本校の教育目標から

本校の教育目標は「一人一人が夢をもち未来を生きる力のある子」である。

「一人一人が夢をもち」とは、子供が生きるための目的・目標を見出すこと、「未来を生きる力」とは、子供が自らの生涯となる未来を、切り拓く力であると捉える。これは今日の課題でも述べた、「よりよい未来を創造していく姿」と重なる大きなテーマである。

教育目標を具現化するためには、自ら新たな価値を追求する中で様々な課題を見出し、既存の資質・能力を駆使して解決していく力などを、相互に関連付けながら育成していくことが重要である。

このような態度や力などを自分のものとしてしっかり身に付け、よりよい自己を求めて、仲間とかかわりながら主体的に課題発見、解決を繰り返して、自らを向上させていくような、「学び続ける姿」を目指していくことで、生きる力が備わった子供が育つと考える。これは、全教育活動を通して取り組んでいかなければならない。

(3) 本校の子供の姿から

昨年度まで本校では、研究主題を「実践力の育成」として、子供が生きる未来において自ら考え、判断し、実際に行動していく力の育成を目指し研究に取り組んできた。さらに、3年次では副題を「主体的・協働的に学ぶ姿をめざして」とし、仲間とのかかわりを深めながら、主体的に学習の質を高め合う学びを追求してきた。また、そのような学びを支える土台となる学級をつくるために、「質の高い集団づくり」にも取り組んできた。

その中で、自己肯定感の高まりや仲間と協働して自主的に学びにかかわる子供の姿が見られた。一方で、知識や技能を身に付けているにもかかわらず、新たな学びを追求しようとする姿が見られた。このような姿の要因として次の3点が考えられる。

まず、学びに必然性を感じていないことである。教師による課題の持たせ方の工夫はもちろんのこと、学習の振り返りを適切に積み重ねさせることで、身に付いた知識や技能及び思考力などが自分にどのようにいきて働いているのかという自覚（以下 学びの自覚）を持たせるような働きかけが必要である。また、子供に自らの現状を理解させ、学びを自分や仲間のためにどのようにいかせるかという見通しを持たせるような働きかけも求められる。このようなこと

から、自らの学びと社会生活とのかかわりに気付かせるような、学ぶ意義を実感させる働きかけを工夫していかなければならない。

次に、学ぶ喜びを十分に感じていないことである。子供は新たな知識を得ることには楽しさを感じている。しかし、できた喜びを「もっと使ってみたい」という意欲にまではつなげられていない。できるようになったことを「何に使えるか」「どのようにいかせるか」と考えさせて、新しい課題や他教科・領域など自ら活用場面を判断し実際に活用できたときに感じる喜びを味わわせるような働きかけが必要である。

そして、追求するための方法が十分に身に付いていないことである。習得した知識・技能とそれをどのように活用するか思考することを結びつけて身に付けていないために、いきで働くものになっていないのである。知識・技能を習得する場面において、子供に思考させるような知識と思考を関連付ける働きかけが必要である。

このような課題を解決し、よりよい自己を求め、学び続ける子供の姿を実現していくには、主体的に学びに向かおうとする態度や能力を身に付ける学習活動の工夫が求められる。そのような学習を通して、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力」を結びつけて活用可能なものにして身に付けさせる必要もある。

そのためには、教科・領域で習得する「知識・技能」、それを使うために働く「思考力・判断力・表現力」、主体的に学びに取り組もうとする態度、自らの感情や行動を統制する情意面、自らの思考を客観的に見つめ直すメタ認知、よりよい人間関係を築こうとする人間性も含めた「学びに向かう力」(以下 資質・能力の3つの柱)を相互に関連付けて働かせることが重要である。さらに、自らが学び続けることで、既存の資質・能力を「質の高い資質・能力」に高めていくことができるであろう。このような学びを実現するための核となるのが「学びを結びつける力」であると考え。以上のことから研究主題を「学びを結びつける力の育成」とした。

2 研究主題について

(1) 本研究における「学びを結びつける力」

本校では、「学びを結びつける力」を以下のように捉える。

資質・能力の3つの柱を高めるために、それらを相互に関連付けて働かせる力

「資質・能力の3つの柱を高める」とは、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力」が相互に高め合うことである。「相互に関連付けて働かせる」とは、例えば子供が知識を使うために思考を働かせる過程において、自らの学びを自覚するように資質・能力の3つの柱それぞれが適切に作用し合うことである。つまり、資質・能力の3つの柱を相互に関連付けて働かせることにより、子供は自らの資質・能力を高めていき、「未来を生きる力」につなげていけるものであると考える。

本研究では、実際に「学びを結びつける力」が働いているとき、子供が知識を深く理解したり、情報を精査して自らの考えを形成したりすることができる。さらに、そのような知識や技能を活用して、課題を見出して解決することや自他の思いや考えを基に創造するような「深い学び」が実現されると考える。そのような学びを通して、自らの資質・能力が伸ばされるとともに、新たな資質・能力も育まれていく。このように3つの柱を関連付けて働かせることが深い学びとつながり、自らの資質・能力を高める力となって一層発揮されるのである。

子供が深く学ぶためには、自らの考えについて自問自答したり、仲間と協働したり、教師や地域人材と対話したり、既に確立した考え方を手がかりにしたりして、自らの思考を広げ深めていくことが必要になる。そのためには、子供同士や教師と子供のつながりが強く、相互に聴き合い認め合えるような人間関係が求められる。適切な人間関係から生まれる1人1人の支持的な態度が、学びの土台となり学び合いの質を高めていくのである。このような学びを通して思考力が高まることで、知識・技能はより多様に働くものになり、その活用場面は、他教科・領域や実生活にまで至るものになると考える。

さらに本研究は資質・能力の3つの柱を結びつけて高めることにより、学び続ける子供の姿を目指す。そのためには、よりよい自己を求めて積極的に課題を見出し、粘り強く解決していこうとする態度を身に付けて学びに取り組むことが重要になる。子供の学びへの高い興味・関心はもちろんのこと、学習活動において自らの課題を解決するための見通しを持つことや学びを振り返り意味づけることが求められる。学びの見通しや振り返りを通して、これまでの学びの自覚を積み上げることにより、子供は既存の資質・能力の有用性を実感し、自己肯定感を一層高めて、自らの可能性を信じて主体的に学ぼうとする態度や能力が培われていくと考える。主体的に学びに向かう態度や能力が身に付くことで、子供は「もっと知りたい」「もっとできるようになりたい」という向上心を持って、新たな課題を見出す。そして、解決に至るために知識・技能と思考を結びつけて働かせる。このように資質・能力の3つの柱が相互に作用し合い、高め合って学び続ける姿が実現されていくのである。

資質・能力の3つの柱は、それぞれが単独で高まるものではない。相互に関連付けられていなければ、いきで働くものにはなり得ないからである。だからこそ、集団の中で、仲間とかかわり合い、支え合いながら子供が自らの学びを自覚したり、課題解決の方法を見通したり、思考を広げ深めたりすることが、「学びを結びつける力」に確かな効力を持たせるのである。

(2) 研究目的

本研究は、生きる力につながる資質・能力を身に付けた子供を育成するために、支持的風土のある学級を土台として、資質・能力の3つの柱を相互に関連付けるための教師の働きかけを明らかにし、その指導効果を子供の姿から検証し、教育課程に反映して、本校の教育目標を具現化することを目的とする。

(3) 研究目標

本研究は、資質・能力の3つの柱への働きかけを工夫することにより、それらの相互の関連に与える効果を調べるようとするものである。

(4) 研究仮説

学習場面において、資質・能力の3つの柱を関連付ける働きかけを工夫することにより、子供が既有的知識・技能を活用して思考を深めたり、学習に向かう態度や能力を高めたりすることを通して、「学びを結びつける力」を身に付けさせることができるであろう。

(5) 目指す子供像

よりよい自己を目指すために、進んで課題を見出し、仲間や物事などとかかわりながら既有的資質・能力を駆使して解決することを、繰り返して自ら学び続ける子供

3 研究について

(1) 研究方法

本研究では、資質・能力の3つの柱を関連付けて高める「学びを結びつける力」を育成することで、よりよい自己を目指して、自らの資質・能力を高めるために学び続ける子供の姿を目指していく。そのために、資質・能力の3つの柱を関連付ける働きかけの工夫を明らかにする研究を推進する。

また、昨年度行った「質の高い集団づくり」を、本研究を支える共通実践として位置付けて取り組んでいく。

(2) 「結びつける力」が具体的に働いている姿

「結びつける力」が具体的に働いている姿を本研究においては以下の3点で設定した。

A 既有的資質・能力を新たな学びに結びつける姿

課題を既有的資質・能力を駆使して解決することを通して、新たな知識・技能を獲得している姿である。この既有的資質・能力とは、各教科・領域内の既習の知識・技能や考え方のみならず、教科横断的なものを活用している姿も含むものである(図1)。

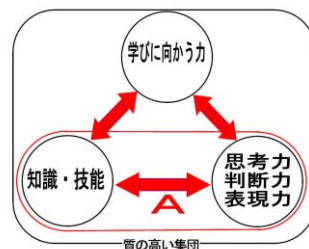


図1 Aの学びの姿

B 自分と仲間との思考や物事を結びつける姿

自分の思考と仲間の思考や自分と物事を結びつけて新たな思考に気づき、さらに深めたり広げたりするような学びに向かう姿である。このような学びを実現することで、学び方の良さを実感し、自らの思考を深めるために、進んで仲間の考え方や様々な物事にかかわろうとする態度が身に付いていくと考える(図2)。

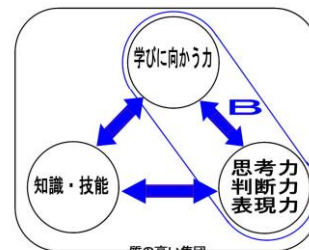


図2 Bの学びの姿

C 学びと自己の生活を結びつける姿

自らの学びを自覚し、学びによって高まった知識・技能をいかして、新たな学びに進んで取り組もうとする姿である。このような態度を身に付けることでよりよい生活や生き方を追求していくことにつながると考える(図3)。

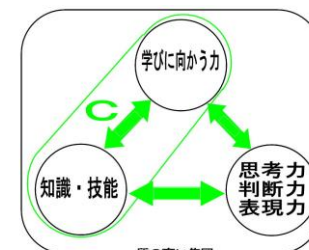


図3 Cの学びの姿

このような姿をめざし、各教科・領域においてそれぞれの特

性をいかした働きかけを工夫して、具体的に目指す学びの姿にどこまで迫れたかを判断する基準を子供の姿で設定して検証し、研究を深めていく。

4 共通実践「質の高い集団づくり」について

「質の高い集団」とは、子供の相互のつながりや子供と教師のつながりが強く、共通の目標に向けての合意形成ができており、仲間とかかわりながら一人一人が主体的に学びに向かう姿が見られる集団である。

昨年度の「質の高い集団づくり」において、学級を形成する教師や子供1人1人が合意した共通の目標を持ち、その達成状況を可視化することで個々の学級づくりへの意識を高めることができた。また、心理学の視点においても、「人間の欲求には段階があり、『集団に所属したい』『仲間がほしい』という欲求が満たされなければ、『他者から認められたい』という欲求や『自らの能力を引き出して自己実現したい』という欲求は表れない」とある。そこで本研究において、本校の教育目標の具現化へ向かうため、「学びを結びつける力」を支える取り組みとして継続し位置づける。

【参考文献】

文部科学省 2017 「中央教育審議会答申『幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について』」 東洋館出版

A・H・マズロー 1987「人間性の心理学ーモチベーションとパーソナリティ」産能大出版部